

# 秦始皇帝時期に通行の草書的文字

## —里耶秦簡でわかった新事実—

Cursive Characters Used During the Reign of the First Emperor of Qin: Facts Newly Found from the Liye Qin Slips

新井儀平

Gihei Arai

秦始皇帝時期は、書体史的に言えば小篆に代表される時代であり、秦隸が通行した時代である。この時期の簡牘に記された筆写体の肉筆文字資料「里耶秦簡」が公になったのは、周知の如く『文物』（二〇〇三・一）に所載の発掘簡報「湖南龍山里耶戰国—秦代 古城一号井発掘簡報」によってである。簡牘三万六千余枚の出土が報告されていたが、その内で当時、影印された数は表裏に記載のある簡を各々一として数え、計六〇点。先のいくつかの拙論では、その時点で目を通すことが可能な限りの文字資料を根拠に、秦代に初出を見る注目すべき出来事を述べてきた。すなわち「龍山里耶秦簡文字字形考」—線の点状化現象を中心として—（『大東書道研究』二〇〇六）、「里耶秦簡文字字形考Ⅱ」—草書化に向う字画の移動と字形の変化—（『大東書道研究』二〇〇九）などがそれである。

発掘簡報以後の整理が進み、二〇一二年になって待望の専刊の大冊『里耶秦簡』第一輯・第二輯（湖南省文物考古研究所編・文物出版社）が刊行され（第三輯～第五輯も刊行の予定とのこと）、膨大な数のほる簡牘文字資料が公になったのである。ちなみに第一輯は遺址の第五、六、八の出土地層から出土した簡牘を、第二輯は第九の地層から出土した簡牘を影印。所載の簡牘数は、整理番号をもとに集計してみると、破損した小片を含め合計六、〇〇〇点を越える。字数は一体どれほどになるのか、数えられる数の状態ではない。その文字資料に仔細に目を通し、全体を俯瞰してみても一瞬目を疑った。これが秦皇時代に行っていた文字かと。驚くべきことは、字画や書法が部分的ではあるがどう見ても草書としかいえないような文字が散在していることである。しかもその量が非常に多いこと

も注目すべきことである。当時、こうした文字がすでに普通に通行していた事が読みとれる。書道史的に、書体史的に遥かに想像を越えたこの新事実の出現は、書体、字形変遷の概念を大きく変えるものであり、再考をせまられることはさけて通れない。

拙論は、大冊『里耶秦簡』第一輯・第二輯で新たに公になった秦代に通行の肉筆文字、その新事実についての考察である。拡大図版を用いて以下の順で論述を試みたいと思う。

#### I 里耶秦簡中に発生した「隸書」と「草書」の分岐

—「道・遷・遣」字に見る字形の変化—

#### II しんにようが着いた文字の全体的な状況

#### III 広範にわたる草書化現象

—筆路の移動とつづき書き—

#### IV 結語

—新事実の出現と書道史再考—






#### I 里耶秦簡に発生した「隸書」と「草書」の分岐


—「道・遷・遣」字に見る字形の変化—

秦始皇時期に通行した肉筆の書写体、秦隸というものの概念は、専刊の『里耶秦簡』が公になったことで大きく変わってきた。ただ単に秦隸という一書体としての認識だけではすまされなくなってきた。その字形と書法の中に想像を遥かに越えたものが含まれていて、書体の変遷に深く関わりを持ち、これらの字が書体史的に極めて重要な部分を占めていることがわかってきたからである。隸書と草書、その両者の発展上での相互関係の実体は、これまではっきり掴むことは出来なかったが、里耶秦簡の新たな文字資料の出現によってその実体が少しづつみえてきた。ちなみに隸書の胎動、草書の胎動がこれ以前の戦国の包山楚簡に遡ることは、既に拙論で度々述べてきた。「関于包山楚簡書法的考察」〔『中日書法史論研討會論文集』北京・文物出版社一九九四年三月〕、「戦国包山楚簡」—篆書中に見える匆卒の文字を中心として—〔『大東書道研究』一九九五年三月〕など。だが、胎動から以後の発達の状況は明確には掴みきれていない。ところが驚くべきことに、なんと秦始皇帝時代のこの時期に、隸書と草書の分岐と考えられるような出来事が起っていたのである。拙論


では、この新事実に着目、まず「道」・「遷」・「遣」の字を例に考察を試みたいと思う。





#### ◆「道」字に見る字形の変化

「道」字について『説文解字』辵部に「首と辵とに従う」とあり、小篆の字形は「」のように偏と旁、つまり左右の関係で作られている。秦の泰山刻石の字もまた同じ。ところで里耶秦簡の「道」字(図1①)では、その形の延長上にあるいわゆる秦隸の姿を示し、②では、その省画と早がきで、の字画が大きく崩れている。この①②では、の終筆は後の隸書のように長く伸びていない。だが、その終筆が隸書の横意識に伴って横にのび出すと、一気に字形に変化が起る。終筆の方向が定まらないまま不安定の状態で、字形上の分岐が始まる。図2は隸書方向へ、図3は草書的发展方向に発展していることが読み取れる。とりわけその図3②③の字形では、なんと六画あったはずの、の、が、早くも省画の限界に達し一本の線にまで変貌しているのである。秦始皇時期にここまで進展していたとは驚きで、これまでの文字資料では想像もできなかったことである。この新事実を書道史を変えるほどの大きな出来事である。記録しておかねばなるまい。ちなみに

里耶秦簡に「道」字は三十字近く出現するが、一本の線状の草書形は二字、隸書の波勢で右に長くのびした隸書字形は七字。以外はどちらとも言えない構造不安定な字と不鮮明な字である。

#### ◆「遷」字に見る字形の変化と書体の分岐

「遷」字は、里耶秦簡中では極めて使用頻度が高い。里耶秦簡は、秦代の地方行政文書で洞庭郡、遷陵県の記録とみられ、「遷陵洞庭」などの記述が多く目に着く。簡中には「遷」字が頻繁に現われる。里耶秦簡の総字数は先にも触れたようにあまりにも膨大な量で数えきれぬものではないが、「遷」字について目を通してみると、不鮮明な文字や字画が欠けていて判読しにくい文字なども含め、計六四〇字ほどを数えることが出来る。

「遷」字のに発生した注目すべきことについて記す。「遷」字に見るそれは、崩れ方や省画の度合、字画の移動や書法変遷上の変化などから大別すると、図4・5・6に掲出した如くなる。「遷」字の構造は、小篆ではが偏傍の関係にあつて左側に位置し「」になっている。図4①②に見る篆書の早がきでは、まだの位置は左右の関係にあるが、


③・④・⑤では、しんにょうの終筆がのび出して字形が崩れ出す。線の長短が定まらず字形は構造的に極めて不安定な状態となる。一字の左右の省画の度合いや崩れ方の進度に大きな差が生じている。篆書概念から離脱したばかりのこの字形は書体的にどう扱うのか、なんとも区別がしにくい字形である。とに角、こんな状態の字が多く通行していたことを認識しておかねばなるまい。ちなみに図4に属するような類の文字は合計で四四〇余り、ざっと三分の二がこれである。

図5と6は、一見してわかる通り書体的に書法的に明確に異なる文字である。図5は、秦の一書体であるいわゆる秦隸で、しんにょうの終筆が横に長くのびて当時の姿を示す。各々ののびし方に違いはあるものの、後の隸書に発展する方向性が読みとれる。

特記する注目すべき事項は、図6に掲出した文字の類である。新たに公になった里耶秦簡でわかった驚くべき新事実である。先の「道」字のところでも述べたが、省画が極限にまで達し、円轉の書き方で一本の線にまで変貌しているのである。これほどまでに簡略草書化したしんにょうの出現は、この時期にまったく前例がなく、書体史における大きな出来事と言っていると思う。それにしても左右省画の仕方はあまりにもちぐはぐである。秦始皇時代に秦隸と草書文字が混交して通行していたということは、まったく想像

もつかなかった事であり、驚くばかりである。ちなみに「遷」字は里耶秦簡中で優に六〇〇字を越えるが、この類の字は一三字を確認することが出来る。

#### ◆「遣」字に見る字形の変化

「遣」字は、小篆では「」に作る。図7はその早がきの字形であるが、図8ではしんにょうが省画で簡略になり、その字形は書体的には説明しにくい不安定な状態になる。まるで生きものが脱皮する時のような瞬間瞬間の一コマを見るが如きである。字形の崩れ方と変化のプロセスは、先の「道・遷」のそれとまったく同じである。図9は秦隸。図10は極端にまで簡略になった円轉の草書。しんにょうを含む文字。里耶秦簡には、書体的に書法的にまったく性質の異なる二つの書体が同居しているのである。書体の分岐は、この字においても同様で、このようなことが、当時に広く通行していたであろうことが想像されるのである。ちなみに「遣」字は、里耶秦簡中に五十字近く現れるが、その中で図10のような円轉の一本線の字は、この五字を見ることが出来る。比率では約一〇％の状況である。

里耶秦簡は、総合的に横意識の波勢や波籜を持った隸書への方向

性を示す字は極端に少ない。ほぼ同時期の「睡虎地秦墓竹簡」に見る秦隸とは対照的である。

## Ⅱ しんにょうが着いた文字の全体的な状況

これまで「道・遷・遣」の三字を取り上げ、里耶秦簡の新事実について述べてきたが、実はしんにょうに関するこのような出来事は、これに限ったことではない。文字数は計二十九字。その文字の使用数の総計は不鮮明な文字を含め八〇〇字を越える。全体を俯瞰すると例の草書の書き方の字は図12に掲出した如く多くの字で盛んに行われている。どうしてこうした現象が起こったのか、どうしてこの時期にここまで進行しているのか、非常に興味深いことであり、秦始皇時代における文字変遷のもう一つの新たな事実として記録しておかねばなるまい。

ところで図11は隸意を含む字形だが、図12に掲出した文字は全て例の書き方の一本線状のしんにょうを含む文字。里耶秦簡中でこの種の使用数は四〇字に近い。しんにょう全体としての比率は五%弱。ちなみに各々の字のいくつかについて記せば、四〇字近く出現する「過」字などでは、一〇%を越えるものもある。文字の使用例が僅か四字以内の「逢・運・迺」などでも、各々その中の

一字が例の書き方で書かれている。



それにしても度々述べてきたように左右省画の度合いと進度には極端な差異があり、構造的に左右がちぐはぐであることは、共通する大きな特色である。こんな事が突然に起るとは考えにくい。前例がない一字の組み合わせだけに、書体的にもこれまでの認識では整理できない内容を含んでいるように思われる。秦代のほぼ同時期の文字資料「睡虎地秦墓竹簡」などではまったく見られなかった現象である。里耶秦簡に現われたこの異常とも言える新事実に接すると、同時期にあるいはこれ以前にまだまだ知られていない出来事が起っていたのではないかとということが想像されるのである。いずれこの件に関しては考察すべきことが生じてくるであろう。

## Ⅲ 広範にわたる草書化現象

### — 筆路の移動とつづけ書き —

里耶秦簡中に発生した字画の省画や線の点状化現象については、本稿以前に拙論で述べてきたが、ここでは里耶秦簡に広範囲にわたって発生した筆路の移動とつづけ書きの現象について記しておく。この事は時代的に書道史的にこれまでの認識では想定外のことであり、広範にわたるこの状況はこの時期におけるもう一つの新事実と

して書いておきたい。最初に「年」字のそれについて紹介し、それ以下に取り上げる各々の文字については省略に記す。

「年」字は小篆では「」のように作り、古く金文では「」のように作る。図13～17に掲出した文字は全て「年」字である。「年」字は、里耶秦簡では記載内容の関係で、「何年何月」で始まる簡が多く「年」字が頻繁に現われる。字画が不鮮明な文字を除き判読できる文字は四〇〇字を越える。図13①はまだ篆書の字画と大差がないが、②③では次第に篆書から離れて行く姿が見える。里耶秦簡の「年」字の多くはこの類である。図14は篆書の忽卒の早がきで続け書きが行われている。この時期の文字としては考えられない新たな動きが始まっている。つまり草書方向への動きが読みとれるのである。図15は、篆書の字画を残存するが、横画に波勢が見える秦隸の体。この類の字は五〇字強。図16ではなんと篆書にあつた数本の斜画が消えている。単純に横画数本を重ねた状態になり、早くも後の草書字形に通ずる形に姿を変えているのである。この類の字は非常に少なく図に掲出しただけの三字である。その姿はタテ長で横意識がなく隸書への方向性とも異なるものであり、篆書本来の形からは想像もつかない形にまで変貌しているのである。図17に出した①②③④は、この時期に初出を見る注目すべき続け書きの文字。なんとも驚くばかりである。その字形からは、続け書きの意識




が明確に読みとれる。書体としてどう扱うべきなのか。ちなみにこの続け書きの「年」字は、部分的な続け書きの文字も含め里耶秦簡中に二〇余字出現する。「年」字の横画部分を三本に書いたりするやり方は、ずっと後の王羲之・十七帖（）の草書に通ずるところがある。ざっと五〇〇年も前に既にこのような書き方の動きが始まっていたのである。

図18以下については簡略に記す。図18①「何」。筆順、筆路がすっかり変り、「口」と「亅」が続け書きになって一つになる。篆書にも隸書にもない書き方で草書のそれと共通点が見える。②「可」、③「寄」も、まったく同様の書き方。図19①「來」。筆路が篆書、隸書とは縁のないような形にまで変化している。続け書きの状態は、草書のそれと大差ない。ちなみに後の王羲之・十七帖に見る形は、これに似た「」に作られている。②「稟」。この字の下部「禾」は、筆順、筆路に移動がある。後の草書の書き方との接点が読みとれる。図20①「定」。この下部では、もとの字画をとどめず一本線でゆらいだ続け書き状態にまで変貌している。②「徒」、③「従」の終わりの部分の書き方もまったく同じやり方。図21①「益」、②「監」、③「盡」は、いずれも下に「皿」がつくが、続け書きで最後の字画が「」形の状態で書き終る。草書に通ずるこんな書き方が早くも当時に行われていたのである。図22①「陵」、②「陽」



は、こざとへんが図に示した如くの状態。ここまでくずれているのである。旁は篆書で不釣り合いながら偏では草書への方向性を感じられる。図23①「發」では、下部の「弓」部分が、伸びて草書のそれと見紛うほどの形にまで至っている。②「癸」。この字のはつがしらは篆書風であるのに、下部はまったく異なる続け書きの草書状態。なんとも上下がアンバランスの結体である。これまで述べてきたように里耶秦簡中では、この字の如く上下、あるいは左右の関係が不釣り合いの字が多く目に着く。別な言い方をすると、部分的に極限にまでくずした草書的書き方が一字中に混入していることである。

#### IV 結語

##### — 新事実の出現と書道史再考 —

里耶秦簡に出現した新事実について述べてきた。結論をあらためて総括すると以下の如くなる。

- ①秦始皇時期に、想定外の隸書と草書の分岐が始まっていたこと。
- ②その分岐の状態が、意外にも横意識の隸書方向というよりも、むしろ草書方向への傾向が強いこと。

③一文字中で部分的ではあるが極限にまで簡略になった草書的文字が出現していること。

④偏旁の書き方、進展の度合いが極端にアンバランスで、書体的に分類しにくく扱いにくい文字が少なからず通行していたこと。

⑤小篆を中心とした秦代に、秦隸と同居して草書的文字が使用されていた。

以上、こんなことになる。

里耶秦簡に出現した新事実、戦国包山楚簡に見る草書の胎動から発生（前漢）に至る間の草書の変遷の経路を探る資料として極めて重要なものとなってきた。草書は漢字の書体としては一番簡略になったものであり、『説文解字』の序に「漢興つて草書あり」とあるが草書の発生はこれまで言われているよりもずっと古いだらうと考えられてきた。草書は隸書の早書き、俗に草隸というものや波磔を持った章草あたりから芽ばえたと考えられているが、こまかい事はわからない。新ためて秦代の書の一面を理解し、草書というものの生い立ちを考究する上で里耶秦簡のこれらの文字資料は大変示唆に富む。書道史の再考が生じてきた。

甚だ気のきかぬことだが、私の所見をまとめて書いてみた。専門家の方々のご叱正を賜りたい。

「道」循說文小篆

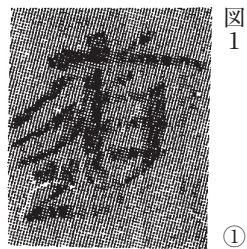


圖 1

8-665

①



9-1801

②



9-511

③



8-1562

④

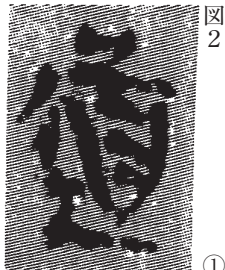


圖 2

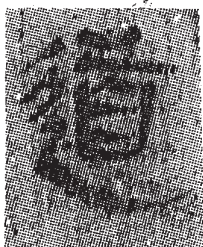
9-736

①



9-2319

②



8-1007

③



9-571

④

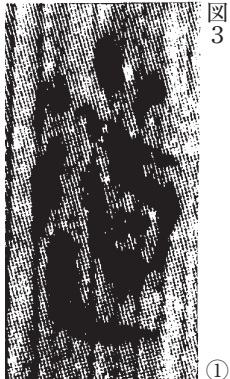


圖 3

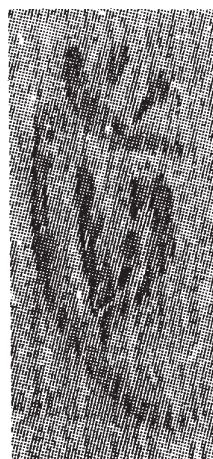
9-1976

①



9-713

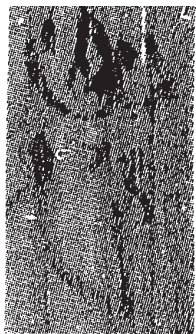
②



8-1484

③





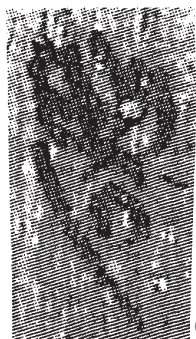
8-2049



8-338



9-292



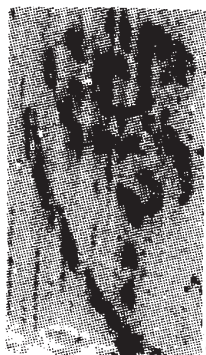
9-2314



9-956



8-475

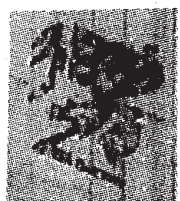


9-2674

図 6



9-23



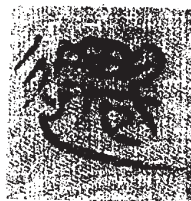
9-23



9-33



9-46



9-24

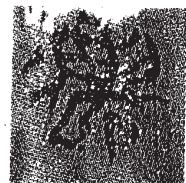


8-1516

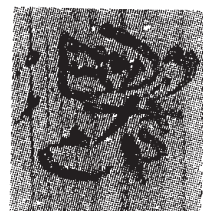
図 5



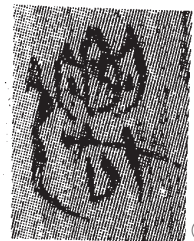
8-1838



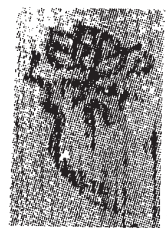
8-90



8-897



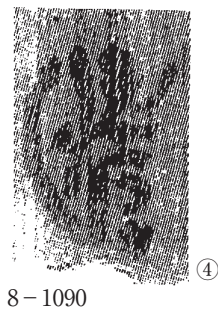
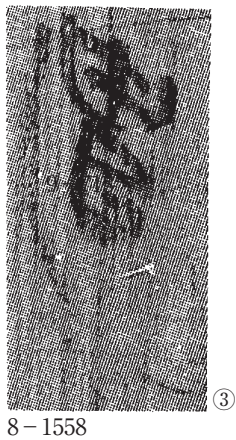
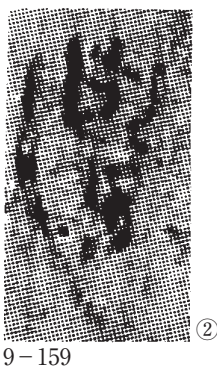
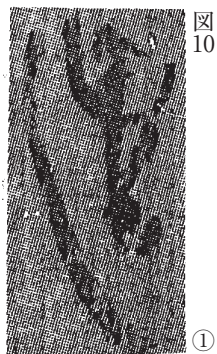
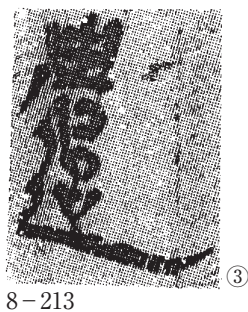
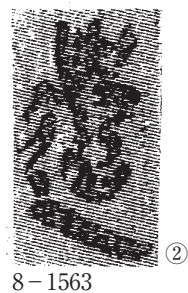
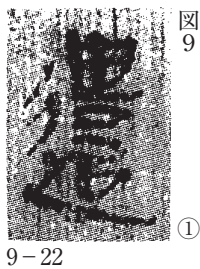
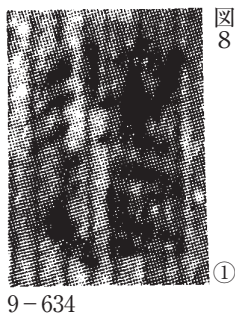
8-1644



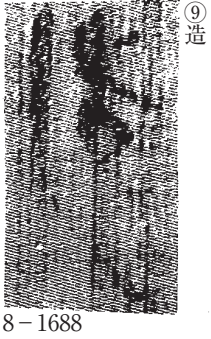
8-432

図 4

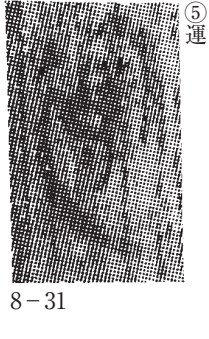
「遣」韻說文小篆



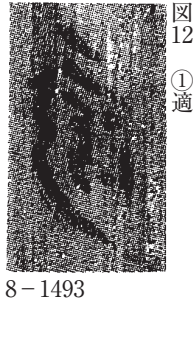




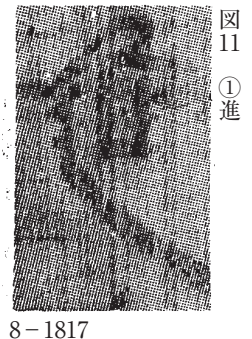
8-1688



8-31



8-1493



8-1817



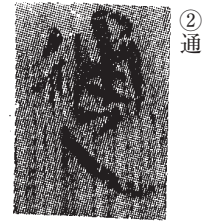
9-2001



8-538



8-1799



8-2014



8-1558



9-572



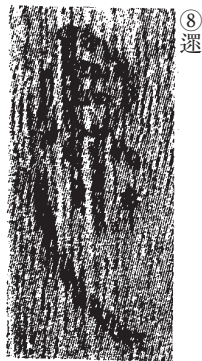
9-572



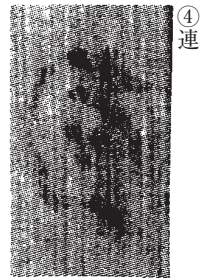
9-2877



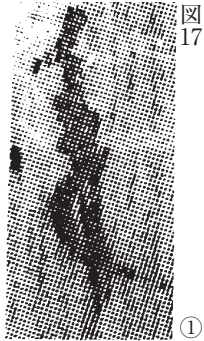
8-2085



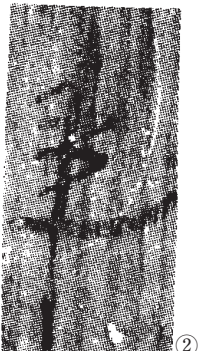
8-1138



9-503



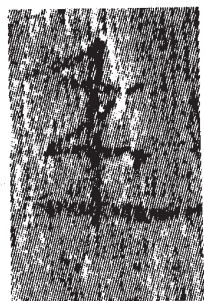
8-1457



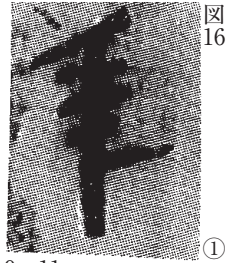
9-2214



8-453



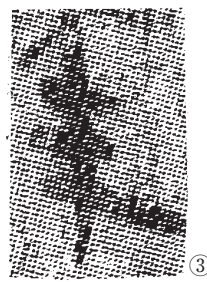
8-2230



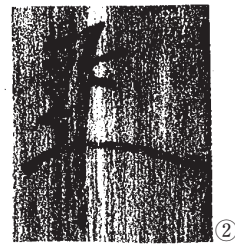
9-11



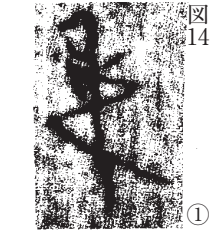
9-1



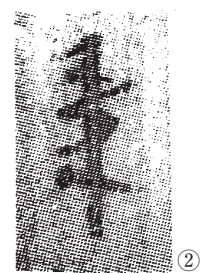
8-925



9-2313



8-891



8-211

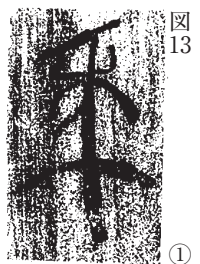


9-2130

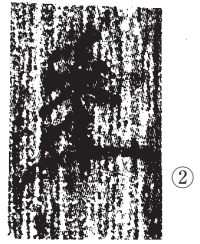


8-1200

「年」  
說文小篆



8-906

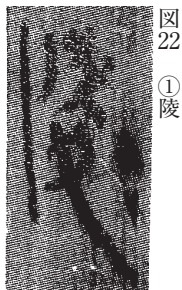


9-1485

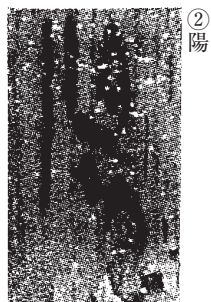


9-2

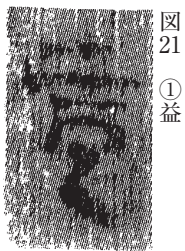




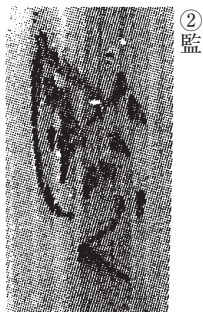
9-752



9-628



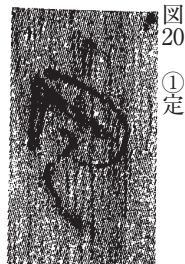
8-1499



8-1006



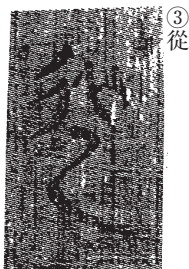
8-78



8-1575



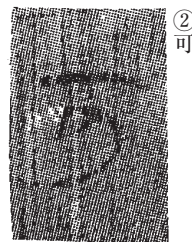
9-1581



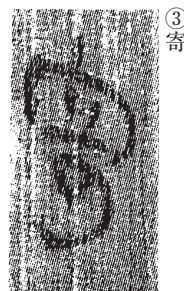
8-2209



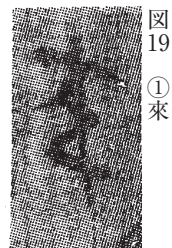
8-1792



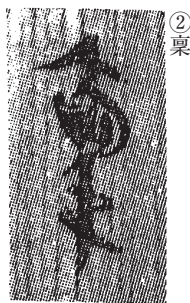
8-1219



8-1734



8-1524



8-1584



8-932



9-1219